



# 旧嵯峨御所大本山 大覚寺

## ■ 大覚寺

<http://www.daikakuji.or.jp/>

平安のはじめ、嵯峨天皇の離宮として建立されて1200有余年。絶えず歩みつづけてきた大覚寺。今日では“華と心経の寺”として親しんでいただいておりますが、数々の悲運を乗り越え、その法灯を守り続けてきました。今日までの人と歴史の軌跡を辿り、この場でしか語ることができない口伝えを織りまぜながら、ここに記して参ります。

弘法大師空海を宗祖と仰ぐ真言宗大覚寺派の本山。

正式には旧嵯峨御所大覚寺門跡と称し、嵯峨御所とも呼ばれる。

平安初期、嵯峨天皇が檀林皇后とのご成婚の新室である離宮を建立されたが、これが大覚寺の前身・離宮嵯峨院である。

嵯峨院が大覚寺となったのは、皇孫である恒寂入道親王を開山として開創した貞観18年(876年)である。

弘法大師空海のすすめにより嵯峨天皇が浄書された般若心経が勅封(60年に1度の開封)として奉安され、般若心経写経の根本道場として知られる。



【拝観時間】 午前9時～午後5時 無休 大人：500円 大沢池：200円

三条京阪前(乗り場：14) 京都バス 61/64 旧嵯峨御所 大本山 大覚寺 250円 約60分/12.7km





### ①宸殿(しんでん)

江戸時代、後水尾天皇より下賜された寢殿造りの建物。天皇に入内された徳川2代将軍秀忠の娘、東福門院和子が、女御御殿の宸殿として使用していたもの。妻飾り、破風板、天井などに装飾がこらされている。廊下・広縁はすべてつぐいす張りとなっている。



### ②御影堂(みえどう)

大正14年建造。大正天皇ご即位に際し建てられた饗宴殿を式後賜り移築したもの。心経殿の前殿であり、内陣正面は心経殿を拝するため開けてある。内陣左右に嵯峨天皇、秘鍵大師(弘法大師)、後宇多法皇、恒寂入道親王など大覚寺の歴史に大きな役割を果たされた方々の尊像を安置する。



### ③正寢殿(しょうしんでん)

12の部屋をもつ書院造り。南北に3列の部屋が配置され、東列は、「剣璽の間」「御冠の間」「紅葉の間」「竹の間」、中央列は、「雪の間」「鷹の間」、西列は「山水の間」「聖人の間」を並べ、その南と東に狭屋の間を配置する。上段の間は後宇多法皇が院政を執った部屋で、執務の際は御冠を傍らに置いたことから、「御冠の間」と呼ばれている。南北朝媾和会議が、ここで行われたと伝わる。



### ④五大堂(ごだいどう)

江戸時代中期(天明年間)創建。現在の大覚寺の本堂。不動明王を中心とする五大明王を安置する。大沢池のほとりに位置し、正面5間、側面5間。正面には吹き抜けの広縁がある。大沢池に面する東面には、池に張り出すように広いぬれ縁(観月台)があり、大沢池の眺望がすばらしい。正面中央は双折棧唐戸、両脇各2間は部戸となっている。



⑤村雨の廊下(むらさめのろうか)

諸堂を結ぶこの回廊は、縦の柱を雨、直角に折れ曲がっている回廊を稲光にたとえ、「村雨の廊下」と呼ばれる。天井は刀や槍を振り上げられないように低く造られ、床は嵩張りとなっている。



⑥勅封心経殿(ちよくふうしんぎょうでん)

大正14年、法隆寺の夢殿を模して再建。殿内には嵯峨天皇をはじめ、後光厳、後花園、後奈良、正親町、光格天皇の勅封心経を奉安し、薬師如来像が奉伺されている。



⑦勅使門(ちよくしもん)

嘉永年間(1848~54)の再建。門は四脚門とし、屋根は切妻造り、正面および背面に軒唐破風を付け、全体は素木造りだが唐破風の部分のみ漆を塗り、金鍍金の飾り装飾を施している。



⑧安井堂天井雲龍図(やすいどうてんじょううんりゅうず)

京都東山にあった安井門跡蓮華光院の御影堂を、明治4年(1871)に移築。堂内部は、内陣の格天井鏡板に花鳥などを描き、その奥の内々陣の折上の鏡天井に壮麗な雲龍が描かれている。



⑨大沢池(おおさわのいけ)

大覚寺の東に位置し、周囲約1kmの日本最古の人工の林泉(林や泉水などのある庭園)。嵯峨天皇が離宮嵯峨院の造営にあたって、唐(中国)の洞庭湖を模して造られたところから、庭湖とも呼ばれる。



⑩心経宝塔(しんぎょうほうとう)

昭和42年(1967)、嵯峨天皇心経写経1150年を記念して建立される。基壇内部に「如意宝珠」を納めた真珠の小塔を安置する。宝塔内部には秘鍵(弘法)大師尊像を祀る。大沢池のほとりに位置し、嵯峨野の四季の風景にわけあった朱塗りの端正な姿が美しい。



⑪名古屋の滝跡(なごそのたきあと)

離宮嵯峨院の滝庭庭園内に設けられたもので、『今昔物語』では百済川成が作庭したものと伝えられる。平成6年からの奈良国立文化財研究所による発掘調査で、中世の遺水が発見され、現在の様相に復元された。



⑫天神島・菊ヶ島・庭湖石(てんじんじま・きくがしま・ていこせき)

池中には天神島・菊ヶ島と庭湖石があり、この二島一石の配置が華道嵯峨御流の基本型に通じている。池のほとりには、茶室望雲亭、心経宝塔、石仏、名古屋の滝跡があり、国指定の名勝地になっている。

## 勅使門

大覚寺の御影堂(心経前殿)の南側正面に、石舞台をはさんで勅使門がごさいます。江戸時代・嘉永年間の再建で門は四脚門とし、屋根は切妻造り、正面および背面に軒唐破風を付け全体は素木造りだが唐破風の部分のみ漆を塗り、金鍍金の飾り装飾を施している大きな菊の御紋をいただいたすばらしい門でございます。今回は、この勅使門にまつわるおはなしをご披露申し上げます。



## 天神島

この大覚寺でも大沢池の島に道真公をお祀りしておりますが、その島を「天神島」と呼んでおります。伝えによるとその理由が意見深長でございまして、大覚寺の縁起に関係して参りますのでその辺からお話し申し上げます。

## 嵯峨御流（さがごりゅう）

第 52 代嵯峨天皇（延暦 5 年 9 月 7 日（786 年 10 月 3 日） - 承和 9 年 7 月 15 日（842 年 8 月 24 日））を開祖とする華道一派です。

大覚離宮（大覚寺）に宮殿を構え、大沢池の花で生け花をしたのが発祥と伝わっています。伝承によると、その時に嵯峨天皇は「爾今、花を賞ずる者はこれを範とする」といい、華道の普及を進めました。

江戸時代末期には、文政 12 年（1829 年）に「嵯峨御所華務職」に就いた未生齋広甫は、華道家元として、その普及につとめました。その結果、大覚寺の華道は全国的に名が知れ渡るようになり、「嵯峨御流」と呼ばれるようになりました。